



小説の未来

(8)

精神的麻薬

春日信彦

薬物の麻薬

麻薬と言えば、アヘン、モルヒネ、ヘロイン、コカイン、大麻、LSD、などの薬物を思い浮かべられるでしょう。また、麻薬の印象は、薬物依存症とか、苦痛を伴う禁断症状とか、麻薬による廃人とか、暴力団の資金源とか、麻薬取締法とか、悪い印象ばかりじゃないでしょうか。でも、麻薬は、医薬品としてなくてはならないものでもあるのです。ご存知のように、麻薬は、麻酔薬、鎮痛剤として使われています。もし、麻薬がなければ、気絶するほどの痛みに耐えながら手術を受けなければなりません。

麻薬の中でも覚せい剤には、痛みに耐えている人とか悩み苦しんでいる人に快感をもたらす効果があります。たとえば、LSD、ヒロポン、シャブ、などと呼ばれる覚せい剤が、一時的な快感を与えるのです。私が最も関心がある麻薬の属性は、“快感”をもたらす点です。人は苦痛が続くと、気持ちを楽にしたいくなります。そして、体に悪いと知りながらつい覚せい剤に手を出すのです。また、いったん、覚せい剤を使い始めると、やめられなくなるのです。経常的に使っていると、幻覚、幻聴が度々起き、次第に日常生活ができない廃人になっていきます。最悪の場合、死に至ります。

麻薬性を有する宗教

人は、飲んだり、吸ったり、注射したりする薬物の怖さを知っていますが、精神をコントロールする宗教のような精神的麻薬の怖さはあまりピンときません。古代から、多くの人々は、危険な薬物を使わずに気持ちを楽にさせる手段として、自然発生的に人を救ってくださる神様を作り出しました。救いを求めて神様に祈願する宗教を一種の精神的麻薬と私は考えています。

しかし、宗教を“麻薬性”を持っている精神と思っている人は、ほとんどいないと言っていいでしょう。私は、宗教を精神的麻薬と称しましたが、なぜかと言いますと、宗教も薬物の麻薬や覚せい剤と同じような効用を持っているからなのです。ご存知のように、神様を信じ、お願すると、気持ちが楽になり、“ハイ”になります。さらに、現実の苦境、苦難から救ってくださる、と思えて、“幸福感”に包まれます。反面、信じている神様の存在を否定されると苦痛や恐怖を伴う“禁断症状”が引き起こされます。

特別な宗教を信じていない人や日ごろ宗教に無関心な人でも、不治の病に侵されたり、受験の前日だったり、面接の前日だったり、どう対処していいか分からなくなると“溺れる者はわらをもつかむ”の苦しい心境に陥り、手を合わせて“神様お助けください”とお願いすることがありますね。そして、神様にお願いするとなんとなく心が安らぎます。これは、言い方を変えると神様を麻薬として利用しているのです。

麻薬性を有する“気持ち”

私たちは、麻薬性を有する宗教と同じような効用を持ったいろんな“気持ち”を子供のころから無意識に作り上げています。たとえば、権力、名誉、社会的地位、学歴、などに基づく優越感とか、お金を持っているときの豊かな気持ちとか、プライドとか、自分を美人と思う気持ちとか、自分は秀才だと思う気持ちとか、このような精神を高揚させる気持ちは、麻薬性を持った気持ちと考えられます。

私は、気持ちを楽にしてくれる精神的麻薬は、日々の苦しみに耐えて生きていくうえで、必ず必要となるものだと思っています。また、この精神的麻薬を断つことによって起きる禁断症状が、いろんな犯罪やトラブルを引き起こしていると思っています。恋愛や犯罪などのテーマで小説を創作していますが、私の場合、その創作過程において“精神的麻薬”の概念が大きく作用していると思っています。

最も身近な例として、人は、褒められたり、お上手を言われたり、お世辞を言われたり、そのようなことをされるとうれしくなりますね。また、TVやニュースで殺人や芸能人の離婚など他人の不幸を知ると、人は無意識に心の底で喜んでいきます。このことは、多くの人が悲劇のニュースに関心を示すことで分かります。これらの現象も、一時的な快感を引き起こす精神的麻薬を投与されたのと同じことなのです。人は生きていれば、“快感”を得たくなるのです。なぜならば、日常生活において不快感が頻繁に起きているからです。

私たちは、“快感と不快感”のバランスを取るために、何らかの方法で快感を得ようとするのです。そして、快感を得るために、小説を読んだり、TVを見たり、映画を見たり、ゲームをしたり、音楽を聞いたり、スポーツ観戦したり、ギャンブルしたり、そのような娯楽行為を行うのです。小説は、娯楽を提供するという主な役割を担っていますが、私としては、そのほかに、人間の心理と知性を探り、複雑な人間関係から生まれる“社会・国家の在り方”を考察する役割も担っているのではないかと考えています。

自作の補足解説

シリーズ以外には、A. 「女教師の賭け」 B. 「幻の恋」 C. 「スラム街の天使」 D 「父と娘」 E. 「身代わり」の5編があります。

A. 「女教師の賭け」では、画家を目指す高校生と女教師との密かな恋愛を描きました。主人公は、画家を目指す高校生の真英雄。母子家庭の真英雄は、授業料の高い美術専門課程のある私立高校に進学できる経済状況になかった。そのため、真英雄は定時制高校に進学するつもりだったが、中学3年生の時、幸運にも全国中学生絵画コンクールで文部科学大臣賞を受賞した。そのことが評価された真英雄は、福岡美大付属高校に授業料全額免除の特待生として入学することができた。

しかし、入学後、なぜか、突然、絵が描けなくなってしまった。まったく、頭から美のイメージが消え去ってしまったのだった。教師から授業料泥棒と言われるまでになり、思い悩んだ挙句、真英雄は退学を決意した。ある日、美術の時間に、真英雄が憧れている准教授絵美先生に退学届を提出しようと退学届を胸ポケットに入れていた。ところが、キャンバスをぼんやり見つめている真英雄の横に立った彼女は、マンションに来るようにとのメモを彼に手渡した。

約束の時間にマンションにやってきた真英雄は、マンションの一室に案内され、10万ドルする絵美先生そっくりのマネキンを見せられる。そのマネキンの肌は、生きている女性の肌とほとんど変わらず、その体型の曲線も絵美先生とまったく同じだった。絵美先生は、真英雄の画才を復活させるために、一度は、自分の体を差し出そうとまで思い詰めた。だが、それでは、真英雄は受け入れてくれないと思い、自分とまったくそっくりのマネキンを製造することにしたのだった。

マネキンを目の前にした真美雄は、感動すると同時に全身に震えが起きた。天から美の女神が舞い降りたのだった。絵美先生は、紅潮した顔の真美雄の手を取るとマネキンの頬に手を押し当て、指先で頭のとっぺんから足の指先までをじっくり味わうように指示した。震える指先は、精巧に作られた女体の肌をゆっくり這いまわり続けた。そして、真美雄のイメージ脳に妖艶な絵美先生の裸体曲線が鮮明に彫り込まれていった。

絵が描けなくなってしまった真美雄のことが心配になっていた母親裕子は、父親輝雄について事実を話す決心をした。父輝雄は失踪したのではなく、本当は、今住んでいるこの部屋で自殺したと真美雄に伝えた。画学生だった輝雄は、画才のない自分に絶望し、自殺したのだった。事実を知らされた真美雄は、時々夢に現れる黄色い髪の青年が、父親であることに気づいた。

そして、二度と絵筆を握らないと決意していたが、画学生だった父親と絵美先生の情熱に報いるために、絵を描き続ける決意をした。その夜、夢に現れた黄色い髪の青年は、あたかもルノワールが描いたかのような絵美先生の裸体画を真美雄に手渡すと、笑顔を残して暗闇の中に消え去った。翌朝、母裕子は、いつか手渡す時が来ると隠し持っていた黄色い絵の具がついた輝雄の絵筆をそっと真美雄に手渡した。

部活と学業が両立できないとか、努力しても成績が伸びないとか、友達ができないとか、いじめられるとか、障がいがあるから軽蔑されるとか、両親に虐待されるとか、両親がいつも夫婦げんかしているとか、両親が離婚したとか、様々な理由で自分の居場所を見つけられず、将来に絶望し、うつ病や引きこもりになる若者が増加しています。さらに、自暴自棄になり、苦しみから逃れるために自殺を図る若者も増加しています。

目先の受験勉強に追われて育った若者たちには、生きることについて考える余裕はないと思われます。でも、生きる上で大切なことは、学歴や才能にこだわるのではなく、今ある自分をしっかり見つめ、与えられた生命を大切にし、自分の“個性”を尊重することではないでしょうか？私の場合も勉強はあまりできませんでしたが、幸運にも小説を書くという“心の支え”がありました。この作品では、今の成果にこだわるより、未来の自分のために“継続すること”の大切さを訴えてみました。

B.「幻の恋」では、現実逃避のために新興宗教にのめり込んだ学生佳織（かおり）と教師拓也（たくや）との淡い恋を描きました。主人公は、新興宗教にのめり込んだ女子大生佳織。教祖を中心に集団生活をしてきた佳織は、無事保護され、両親のもとに帰ることができた。しかし、無事保護されたにもかかわらず、神から引き離されたことによる絶望から、すでに数人の女子学生が自殺していた。その二の舞を踏んでは大学の名誉にかかわると案じた理事長は、自殺防止のために佳織を安部精神病院に入院させた。

新興宗教に一度のめり込んだ少女の精神的回復を図ることは、ドクターでも困難を極めていた。そこで、ドクターは、モルモットの拓也を使ってどの程度の効用があるか実験してみることにした。そして、依然として心を閉ざしていた佳織に拓也を引き合わせた。幸運にも、拓也と佳織は意気投合し、拓也は、高校生の娘、佳恵（よしえ）に会わせることを思い付いた。というのは、天真爛漫な佳恵の影響を受けて、佳織が現実の素晴らしさを再確認し、未来を見つめてくれるような気がしたからだった。そして、早速、京都に住んでいる一人娘佳恵に会わせる段取りをとった。

出会った佳織と佳恵は、それぞれの思いを語り、佳織は次第に未来を見つめるようになった。テニスをやっている佳恵が、スポーツジャーナリストを目指しオーストラリアへの留学を語ると、語学が得意な佳織は美術評論家を目指しイタリアへの留学を語った。二人は、各自の夢を語り、将来、再会することを約束した。そのことを知った拓也は、今回の旅行の成果と佳織の成長をドクターに報告した。

現在の精神病の治療においては、投薬が中心になっている。しかし、ほとんどの場合精神安定の効果はあっても、精神の回復はなされていない。それどころか、薬が麻薬の働きをしてしまい、薬依存症に陥ってしまっている。そこで、ドクターが新しい治療方法として考えていたのが、精神病の治療にモルモットの人間を使うことだった。モルモット拓也を使ったことによって、宗教に洗脳された佳織の精神回復が図られたことは、ドクターにとって大きな成果であった。

人は、精神的苦痛を和らげるために、また、現実の苦悩から逃避するために“精神的麻薬”である宗教にのめり込む。この現象は、古代から続いているように見受けられる。私の小説は、宗教、権力、名誉、恋愛など精神的麻薬をいろんな角度からとらえ、考察していくものです。作家は、人間の未来を考える上で、精神的麻薬を客観的に解析し、それに伴う禁断症状と自ら格闘する必要があるのではなかろうか？

C. 「スラム街の天使」では、貧困社会がもたらす家族の悲劇を描いてみました。主人公は、蟬人形のような笑顔を失った少女スアール。スモーキーマウンテン地区で生活していた貧困家庭の少女スアールは、母親の薬代を得るために借金したが、返済期日までに返済することができず人身売買ブローカーに引き取られた。そして、彼女はマフィアに売られ、彼らのコールガールとなった。

さらに、マフィアは、CIAとの取引を有利に運ぶために、美貌の彼女をCIAのコールガールに利用する計画を立てた。そして、手始めに彼女の紹介AV動画を作成し、CIAに送ることにした。そのAV動画制作を依頼されたAV社長は、高額な報酬に不信感を抱いたが、断り切れず引き受けた。期日が迫っていたため、早速、社長は、AV監督近藤ヒカルを呼び寄せ、少女のレズ動画制作を期日までに仕上げるように指示した。

日本に連れてこられた笑顔を失った14歳の少女スアールは、マンションの一室に軟禁され、キムという通訳に監視されていた。美貌の少女に興味を抱いたヒカル監督は、キムから彼女の身の上を聞き出すことにした。女優の優希の助けを得て、キムから得た情報は、ヒカル監督に衝撃を与えた。その内容とは、マフィアに利用された後は、口封じのために殺される運命にある、ということだった。思い悩んだ挙句、ヒカル監督は、必ずスアールを世界的女優にするという約束で、彼女を買い取ってほしい、と社長に願い出た。

土下座をしてお願いしたヒカル監督の情熱に押し切られた社長は、5000万円を捨てる思いで、彼女を買い取った。ヒカル監督は約束を果たすべく、彼女を映画「スラム街の天使」の主演女優として出演させた。その映画は、世界的ヒットとなり、彼女は社長に恩返しを果たすことができた。しかし、そのころ、ヒカル監督は、AV界から姿を消し、彼の所在を知るものは誰もいなかった。

新興国の貧困地帯では、一般的に知られていない人身売買、内臓の売買、など非人道的な売買が日常的に行われている。スモーキーマウンテン地区の売買された笑顔を失った少女スアールの運命を通して、資本主義経済が生み出す貧困が被害者と犯罪者を生み出していること、また、国家と内通する犯罪組織、マフィアや暴力団が、国際ビジネスに深くかかわっていることを浮き彫りにしてみました。